

2022年7月30日(土) 12:10 ~ 13:00

会場

第6会場 東京大学本郷キャンパス  
医学部2号館本館3F大講堂

# 凝固制御因子活性の 標準化における 重要性と進捗状況

座長

**森下 英理子** 先生

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科保健学専攻  
病態検査学講座 教授

演者

**家子 正裕** 先生

岩手県立中部病院診療部臨床検査科長

本ランチョンセミナーは事前申し込み制です。

共催

第23回日本検査血液学会学術集会

株式会社 シンテスト

## 凝固制御因子活性の標準化における重要性と進捗状況

岩手県立中部病院診療部臨床検査科長

**家子 正裕** 先生

アンチトロンビン(AT)、プロテインC及びプロテインS(PS)などの凝固制御因子の先天性欠乏症による血栓症は、「遺伝性血栓性素因による特発性血栓症」として難病(327)に指定されている。その診断には、それぞれの活性値が健常成人の基準値下限未満であることが条件となる。しかし、これらの因子の測定試薬は多数存在し、基準値は試薬毎で異なっている。さらには、医療施設や臨床検査センター独自の基準値もあり、診療現場で混乱を招いている。そこで、日本検査血液学会及び日本血栓止血学会の標準化委員会は合同で凝固制御因子標準化ワーキンググループ(WG)を組織し、各試薬の標準化と日本健常成人における基準値の決定を行っている。

AT標準化は終了している。入手可能な7試薬のハーモナイゼーションを行い、健常成人およびAT欠乏症患者のサンプルを用いて我が国における健常成人のAT活性基準値(75.1~135.7%)を決定した。現在はその普及に努めるべく、臨床検査センターなどに検討を依頼しているところである。

また、PS活性の標準化も進行中である。PS活性測定試薬は3種類があり、A試薬はAPTTをベースとしB試薬はPTをベースとした測定系で、共にfree PS活性を凝固時間で測定する。一方、シノテスト社の「総プロテインS活性II“シノテスト”」は、free PSのみならずC4bBPと結合しているPSも含めたtotal PSの活性を合成基質法で測定する。このように測定原理や測定対象が異なっているため、WGは標準化の前に、これらの試薬における測定値の誤差検定を行い、標準化が可能な偶然誤差であることを確認した。現在、3種の測定試薬の標準化及び日本健常成人のPS活性基準値の設定を試みているところである。本講演では、結果の出たところまでを報告する予定である。